

旧徳山村年表  
国登録有形文化財・旧宮川家住宅主屋の移築に関連して

南本有紀

The chronological table of TOKUYAMA village  
According the relocation of the MIYAKAWA housing

MINAMIMOTO Yuki

**要旨** ダム水没のため廃村となった旧徳山村から移築復元した旧宮川家住宅主屋は、現在、岐阜県百年公園にあり、岐阜県博物館が管理・活用している。廃村・移築から30年を経て、とくに茅葺屋根の衰耗が激しく早急な対応が必要になっている当該建造物について、県では国登録有形文化財に登録し、国庫補助を活用した整備事業を進めている。その一環として刊行した保存活用計画の策定過程で作成した関連年表をもとに、廃村前後の徳山村とその民家について概観し、保存活用の意義を訴える。

はじめに

旧宮川家住宅主屋（以後、「旧宮川家」と記す）は、旧徳山村戸入（現岐阜県揖斐川町）から岐阜県百年公園（岐阜県関市）に移築復元された山村民家である。建築は明治前期に遡り、「入母屋造の茅葺きで、広間型の平面や半間毎の柱間を板張りとした外壁、土間隅部の紙漉き部屋など、美濃地方西部の山村農家の特徴をよく示す」<sup>1</sup>として国登録有形文化財に登録されている。

旧宮川家の旧立地は、越美山地の深い渓谷沿いにおいて、現在、日本一の総貯水容量を有する国内最大級の中央遮水方ロックフィルダム・徳山ダムのダム湖に沈んでいる。このダムによる水没世帯数466戸は、東京都・小河内ダム（945）、岩手県・湯田ダム（622）、奈良県・池原ダム（529）に次ぐ大規模なもので、徳山村は全村水没・廃村となった。

水底の徳山村は、一方で、日本民俗学の聖地ともいえる場所である。日本初の本格的フィールドワーク「山村調査」<sup>2</sup>の調査地のひとつであり、詳細な民俗誌【桜田勝徳、1951】によって往時の姿を克明に知ることができる。以来、典型的かつ特異な山村として多くの民俗学徒が訪れ調査記録を残してきた<sup>3</sup>。民俗学のみならず村内には20を超える遺跡が点在し、縄文時代に遡る人々の生活の場であった村と、その生活を育んだ豊かな自然環境が失われることは、ダム計画当時から衝撃を以て受け止められた。とくに廃村前後の1980年代は全国的に多くの注目を集め、調査活動も活発に行われている。

令和元年度から2ヶ年にわたって旧宮川家の保存活用計画を策定するに当たり、下準備として、こうした村の動向を追い、年表を作成した。本稿はその年表とこの作業で得た所感をまとめたものである。

1 徳山ダム計画の50年

年表を見て、最初に目につくのはダム関係の記述である。ダム計画が村に最初にもたらされたのは昭和32年（1957）、二転三転を経て、最終的に徳山ダムが竣工したのが平成20年（2008）、都合50年以上かかった一大プロジェクトであった。

その一方で、村の近代化は遅々として進んでいなかった。ライフラインである電気・水道・交通網はもちろん、郵便・電話・テレビも県内で最も遅い普及である。山中の深いV字渓谷に穿たれた各集落が、長らく孤絶しつつ自助自立の生活を営んできたようすが窺われる。翻って、自然の資源を古来の知恵で活用する豊かな山村の暮らしを彷彿させもする。

実際、村は過疎化と財政難に苦しんでいた。廃村後を協議する揖斐郡町村長会・徳山ダム研究会（助役会）では、当初、徳山村と①藤橋・坂内・久瀬・揖斐川、②藤橋・坂内・久瀬、③藤橋・坂内、④坂内、⑤藤橋との5合併案が検討され、①の広域合併が望ましいとされたものの、ダム計画の不透明さと徳山村の起債8億円等が忌避されて結論を先送り、県の主導で⑤案が採られることとなった<sup>4</sup>。合併前でも県内最少人口で、同じダム問題

を抱える隣村との最小限の合併である。これにより藤橋村は、大半の旧村民が岐阜・本巣市等に移住した無人の旧村域を加えて、全国最少の人口密度となった<sup>5</sup>。全国一の過疎の村となった藤橋村では、しかし、アイディアマンとして知られた中河芳美村長が、ダムを活かし、高齢化を逆手に取った村づくり構想<sup>6</sup>を推進したが、志半ばで病に倒れている（1991 没）。

とまれ、ダム計画が半世紀にわたって具体化しないまま残り続けることで、過疎に苦しむ中山間地域の村が積極的な地域振興策を打てないまま、じわじわと村の体力を奪われていったようすが年表から窺える。村の主幹産業であった林業、中でも製炭は燃料革命<sup>7</sup>によって急速に衰退し、代わって災害復興・公共工事が主要な現金収入源になった<sup>8</sup>。「どうせ水に沈む」「ダムができれば、企業者の協力金や交付金・固定資産税収入が見込める」と、一方でダム建設の具体化・実現をにらみつつ、一方では積極的な産業基盤・生活環境の整備がほとんどされないままであったのだ。

少子高齢化は世界の趨勢で、とりわけ日本では避けられない情勢だ。徳山ダムがなくても、徳山村の未来は明るいとは言いがたかったに違いない<sup>9</sup>。実現しなかった中河村長のリタイアメントタウン構想は、現在なら時宜にかなった施策だったろう。それにしても、離村・廃村まで 30 年はなすすべなく過ぎていったように思われる。逆にいえば、村の生業形態・生活様式は前近代的なまま温存されていたのである。

## 2 徳山村の遺産：掘り起こしと継承

再び年表に目を転じると、廃村（1987）からダム竣工（2008）まで 20 年の空白がある。この間、盛んにおこなわれたのが、調査顕彰活動であった。まず、地元有志の地道な表探で等閑視されていた遺跡の存在が明らかになり、全村で大規模な発掘調査が実施された。報告書が刊行され、出土遺物は、現在、県文化財保護センターが収蔵しており、時々展示公開されている。県内考古学史においても特筆すべき事業と成果であり、この発掘に加わった多くの調査員が今も県文化行政に携わっている。

つぎに、移転に伴って家屋道具類の破却が目立つにつれ、民俗資料への関心が高まった民具は、村役場の呼びかけで組織的に収集・整理されて、国重要有形民俗文化財「徳山の山村生産用具」に結実した。これらは、現在、徳山民俗資料収蔵庫で見ることができる。

民家は廃村の少し前、1970 年代からの民家ブーム、1990 年代の古民家再生ブームにのって、引く手あまたの

状況で、村幹旋だけで 32 軒が村外に移築された。今回の追跡調査ではその内訳を知ることができなかったが、行政による展示施設利用のほか、レストランやゴルフ場レストハウス、別荘などへの転用が多かったようである<sup>10</sup>。前者の例として岐阜県博物館の旧宮川家などが挙げられる。後者の例としては、静岡県修善寺町（現・伊豆市）に 9 軒の民家が移築され、現在も活用されている（修善寺虹の郷）<sup>11</sup>。但し、修善寺の移築について現地確認した【片桐勝信, 1988】は「復元というより再利用」であると述べ、自然公園内のレクリエーション施設という利用目的から「徳山の家そのままに復元されなくてもしかたのないことであって、灰となるよりもこれだけでも残ったことに満足するより外はない」と理解を示している。片桐は商社マンとして活躍する傍ら、揖斐谷の民家の保存活動をしており、谷汲村の農家（1977）<sup>12</sup>に続いて、上開田・旧山崎家を解体、自身が住職を務める大野町・陽勝寺へ移築している（1984）<sup>13</sup>。

民家についてももう少し述べる。県内で文化財として復元移築されたもののうち、岐阜県博物館・旧宮川家は建築当初に復元され、岐阜市ファミリーパーク・旧増山家は移築当時の姿を残し、本巣民俗資料館・旧神足家は増築部分を残し、徳山村ではなかった自在鉤を追加するなど、近世～近代の古民家の類型として整備され、移築の様相も一様ではない。

また、これらは全て木造茅葺入母屋造で、草屋根は定期的なメンテナンスを前提としており、廃村・移築後 30 年を経た現在、いずれの民家も保存上の問題を抱えている。このうち揖斐川歴史民俗資料館・旧広瀬家は平成 22 年（2010）に全面葺き替えを済ませ、最も保存状態がよい。本巣民俗資料館・旧神足家は維持管理を優先して、平成 15 年（2003）にトタン板葺きに変更されている。岐阜市ファミリーパーク・旧増山家と関市中池公園・旧岩菅家は、岐阜県博物館・旧宮川家と同じく屋根材の腐朽・損耗のため立ち入り禁止になっている。往時の生活者の高齢化が進む中、茅葺きの方法のほか、緩んだ栓の締め方、茅の採取と保管など、日々のメンテナンスに関する知識は、年を追うごとに失われており、茅葺きの耐久年数の目安となる 30 年という節目に今後の継承について楽観できない状況といえる。

## 3 ダム移転と生活変容

人の暮らしはまさにサイトスペシフィックであり、徳山村の生活様式は周囲の自然環境を含めた徳山村でしか実現できないことは論を俟たない。離村した後も、旧村

民の旧徳山村での生活は継続していた。試験湛水(2006)が始まり、物理的に入村できなくなるまで、山菜やキノコ、木の実(トチノミ)、薬草の採集、狩猟漁撈等のために少なからぬ往来があり、ただ故郷を偲ぶためだけに短期間滞在する人もあった<sup>14</sup>。「村におる間、ここでしかできんことをやっておきたい」<sup>15</sup>という無理からぬ動機である。[大西暢夫, 僕の村の宝物: ダムに沈む徳山村山村生活記, 1998]などのフォトドキュメントを読むと、大自然の中で生き生きと生活を営むお年寄りのたくましい姿が活写されていて圧倒される。

ところが、他方で、移転者たちには厳しい現実が待ち受けていた。山村から地方都市への移住は大きな生活変容を伴い、適応不全に陥って生活が暗転してしまう人が多く見られたのである<sup>16</sup>。

カメラばあちゃんの名を馳せた増山たづ子は「冬は仕事にならんから、昼間っから集まって、飲んで、歌って、踊って、ね。それ以外の季節は冬を楽しく過ごすために働くようなもん」<sup>17</sup>と村の暮らしを懐かしんでいる。「みんなで仕事を手伝ってな、歌ったり、笑ったりするうちに全部片付いてしまってる。徳山の人は物に困ったことがない。米がないといえは持ってけー。(略)みんなが助け合ってた。」<sup>18</sup>

ここに語られる濃密な人間関係はもちろん、山仕事や田畑の世話で忙しく過ごし、里山の恵みから自給自足で賄う徳山の暮らしを都市部の移転地で再現することは不可能である。もし、移転地が藤橋村や坂内村などの徳山村に似通った環境であれば結果は変わっていたかもしれない。しかし、国を挙げて向都離村の世相の当時、こんな後知恵は湧かなかっただろう。

徳山特有の栃山慣行に見られる特産のトチノミは、豊富な水量を誇る村の清流でなければあく抜きが難しい。地野菜である徳山唐辛子を使ったカラカラ大根も、焼畑で育った大根だからこその味だった。

### おわりに ダムとニューノーマル

こうして徳山村年表から徳山ダムを見ると、国の方針の紆余曲折が透けて見える。高度経済成長期に拡大を続ける電力と水使用のために計画された利水・発電ダムは、水余りになると、治水・利水・発電の多目的ダムに変更され、一時は見直し事業にも数えられた。目を現代に転じると、令和2年7月豪雨(熊本豪雨)など、頻発する水害が激甚化する昨今は、「ダムに頼らない治水」が唱えられ、凍結されていた川辺川ダムが多目的ダムから流水型ダムに仕様変更して計画推進の方向である。

「揖斐川はダムと発電所の町」という<sup>19</sup>。木曾三川のひとつ・揖斐川は、上流から徳山ダム、横山ダム、久瀬ダム、西平ダム、揖斐川支流・根尾川(本巣市)に金原ダム、上大須ダム、坂内川に神岳ダムが連なり、発電が行われている。当然のことながら、ダム建設による移転集落は徳山に限らない。

[佐藤晃之輔, 2001]によると、高度経済成長期に始まり、昭和・平成の町村合併で進む行政による廃村に加え、中山間部は、インフラ整備が遅れ、生活環境の不備や地域や時代にあった新産業の振興策が図られず、自発的な離村による廃村が進んで、多くの山村が廃絶してきた。やはり徳山の廃村はダムの有無にかかわらず不可避だったのかもしれない。

[五十嵐太郎, 2020]は「世界的にみても東京は驚くべき速度でスクラップ&ビルドがおこなわれて」おり、30年で建物が入れ替わり、絶えず街並みが更新されてきたと述べる。五十嵐が「見えない震災」と呼ぶ、この激しいスクラップ&ビルドは従来にない速度で町と暮らしを刷新している。山村とは別の理由ながら、東京ですら街並みを保つことができない現代日本のあり様から徳山廃村は当然の帰結ではあった。

さらに、徳山に関しては、現地での生活体験を持つ人々、伝承者に身近にあった人々が高齢化によって櫛の歯が欠けたようにいなくなり、懐古の情も薄れてきたように思う。平成の30年間を経て、令和の今から振り返ると、2000年代の昭和趣味はノスタルジーを実感できる最後の世代が牽引したことが了解される。囲炉裏の火に鍋をかけた実体験を持つ世代が圧倒的少数となった今となっては、徳山村の民家の作る空間は、まるで「おとぎの国」のように感じられる。徳山村そのものがない現在、旧宮川家などの移築民家は徳山のリアリティを体現する貴重な生き証人なのである。

コロナ禍で急速に普及したニューノーマルは、人と人のリアルな接触を回避させる。新型コロナウイルス流行の終息が見えない現状、実物の存在感こそが存在意義である博物館としても、今後の活動に大きな転換をもたらされざるを得ない。

そうだからこそ、博物館員として実感するのは、モノは人間よりも長生き(長持ち)するということである。家は、建てた人、住んだ人がいなくなっても残り続ける。旧宮川家は徳山村がなくなった後も30年を永らえ、今後も徳山の暮らしを後世に伝え続けていくのだ。岐阜県博物館は託された意義を強く訴えねばならないと感じている。

## 注

- 1 [登録有形文化財（建造物）一覧, 2018]
- 2 柳田国男らの「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」。[矢野敬一, 2010] [田中宣一, 「山村調査」追跡調査の追跡, 2017] 参照。
- 3 研究史と旧宮川家の詳細は [岐阜県博物館, 2020] を参照。
- 4 [「広域合併は困難」徳山村問題で県に報告, 1985] [藤橋村と二村合併に 県が最終方針固める, 1986]
- 5 [母なる揖斐・長良・木曾：第2部・水利用 5, 1986] [消える村・徳山：2 過疎と高齢化（上）, 1987]
- 6 [消える村・徳山：3 過疎と高齢化（下）, 1987] [オッふるさと：藤橋村（岐阜） 資料館充実に力入れる, 1987]
- 7 昭和30年代・高度経済成長期に起きた急激なエネルギー源の転換。石炭・薪炭が化石燃料に取って代われ、家庭用燃料も石油・ガスに転換、薪・木炭が姿を消した。（森林・林業学習館：森林・林業用語検索「燃料革命」[https://www.shinrin-ringyou.com/search\\_term/sch.php?k=%E7%87%83%E6%96%99%E9%9D%A9%E5%91%BD](https://www.shinrin-ringyou.com/search_term/sch.php?k=%E7%87%83%E6%96%99%E9%9D%A9%E5%91%BD)) (2021年1月31日閲覧)
- 8 [田中宣一、三田村成孝、岩崎竹彦, 1986]
- 9 山村振興法に基づく「振興山村」734（全市町村の43%）は、林野面積の61%、耕地面積の22%、総人口の3%を占める。振興山村は林野面積85%、耕地面積4%。人口は45年間（1965-2010）で42%減少（全国は29%増加）。平成22年（2010）の65歳以上は34%（全国平均23%）で、他地域に先がけて高齢化が進行し、就業人口は30年間（1980-2010）で32%減少している。学校数は35年間（1975-2010）で小学校数は49%（全国は11%減）、中学校数は41%減少している。
- 振興山村の財政力指数は平均0.39、全部山村（全域が「振興山村」となっている市町村）は0.24で、全国平均0.53を大きく下回り、厳しい財政状況。（農林省農村振興局農村政策部地域振興課「振興山村をめぐる状況」[https://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s\\_about/index.html](https://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s_about/index.html)) (2021年1月9日閲覧)
- 10 [岐阜県博物館, 2020]
- 11 <https://www.nijinosato.com/> (2021年1月31日閲覧) 新型コロナウイルス感染拡大のため現地確認はかなわなかった。
- 12 [現代の顔：「茅葺き民家」はかくして残った, 1977]
- 13 2020年5月22日に聞き取り。旧山崎家は壁がない状態（再建途中）である。
- 14 [ニュース・グラフ：その後の旧徳山村, 1990]
- 15 [さようなら徳山村：10 思い出づくり, 1987]
- 16 [木村一夫, 1997] [浜本篤史, 2001]
- 17 [「徳山村」'92・冬：6 交友録, 1992]
- 18 [写真家・増山さん、作家・藤川氏が講演, 1991] JTいきいきフォーラム「感動上手のすすめ」紹介記事。
- 19 揖斐川歴史民俗資料館常設展示。

## 参考文献

## 新聞・雑誌記事

- 「広域合併は困難」徳山村問題で県に報告. (1985年12月17日). 岐阜日日新聞.
- 「徳山村」'92・冬：6 交友録. (1992年2月26日). 朝

## 日新聞.

- オッふるさと：藤橋村（岐阜） 資料館充実に力入れる. (1987年2月14日). 朝日新聞.
- さようなら徳山村：10 思い出づくり. (1987年3月14日). 中日新聞夕刊.
- ニュース・グラフ：その後の旧徳山村. (1990年7月6日). 朝日新聞.
- 現代の顔：「茅葺き民家」はかくして残った. (1977). 週刊新潮 9月29日号.
- 公共事業費6兆695億円＝国土強靱化へ「流域治水」：来年度予算案. (2020年12月21日). 時事通信社 iJAMP.
- 写真家・増山さん、作家・藤川氏が講演. (1991年10月28日). 岐阜新聞.
- 消える村・徳山：2 過疎と高齢化（上）. (1987年3月27日). 岐阜日日新聞.
- 消える村・徳山：3 過疎と高齢化（下）. (1987年3月28日). 岐阜日日新聞.

## 文献

- IZU PHOTO MUSEUM. (2014). 増山たづ子：すべて写真になる日まで. 静岡県長泉町：IZU PHOTO MUSEUM.
- 岐阜県教育委員会. (1971). 岐阜県の民家：岐阜県民家緊急調査報告書. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県教育委員会. (1972). 徳山村民俗調査：概報 昭和46年度民俗資料緊急調査. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県教育委員会. (1978). 岐阜県の民家：昭和52年度民家緊急調査報告書. 岐阜県教育委員会.
- 岐阜県博物館. (2020). 国登録有形文化財（建造物）旧宮川家住宅主屋保存活用計画. 岐阜県関市：岐阜県博物館.
- 吉岡勲. (1986). 徳山村門入を調査して. 著：吉岡勲, 道遙けく：一郷土史学徒のあゆみ. 岐阜市：大衆書房.
- 五十嵐太郎. (2020). 建築の東京. 東京都：みすず書房.
- 佐藤晃之輔. (2001). 秋田・消えた村の記録. 秋田市：無明舎出版.
- 桜田勝徳. (1951). 美濃徳山村民俗誌：岐阜県揖斐郡徳山村. 東京都：刀江書院.
- 小川直之、新谷尚紀. (2020). 講座日本民俗学 1：方法と課題. 東京都：朝倉書店.
- 杉本尚次. (1998). 民家の保存・再生・活用：民家野外博物館を中心として. 民俗建築 113.
- 早川典子、高橋英久. (2016). 日本における木造住宅の移

- 築事例に関する研究：保存活用を目的とした展示施設への用途変更事例を中心として。住総研 研究論文集 43.
- 大西暢夫。(1998). 僕の村の宝物：ダムに沈む徳山村山村生活記。東京都：情報センター出版局。
- 大西暢夫。(2009). 徳山村に生きる：季節の記憶。東京都：農山漁村文化協会。
- 大西暢夫。(2020). ホハレ峠：ダムに沈んだ徳山村百年の軌跡。東京都：彩流社。
- 大内田史郎。(2020). 全国の野外博物館の展示構成に関する研究。研究報告 令和元年度 建築分野 4.
- 中京大学郷土研究会。(1967). 美濃郷土文化調査報告書：揖斐 徳山編、日坂編。愛知県名古屋市：中京大学郷土研究会。
- 中谷哲二。(2002). 天理にあった合掌造り民家：ある野外民家博物館的施設の軌跡。天理参考館報 15.
- 朝日新聞社岐阜市局。(1986). 浮いてまう徳山村。愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 田中宣一。(1989). 村の解体と信仰生活の変容：徳山ダム建設による宗教施設の移転をめぐる。民俗学研究所紀要 13.
- 田中宣一。(1994). ダム建設移転に伴う世帯の変化：岐阜県揖斐郡旧徳山村民の場合。日本常民文化紀要 17.
- 田中宣一。(1994). 桁の実から桁板へ：岐阜県徳山村の桁の木利用について。著：原泰根，民俗のこころを探る。大阪府堺市：初芝文庫。
- 田中宣一。(2000). 徳山村民俗誌：ダム水没地域社会の解体と再生。東京都：慶友社。
- 田中宣一。(2017). 「山村調査」追跡調査の追跡。民俗学研究所紀要 41.
- 田中宣一。(2020). ダム建設と伝統文化。地域の伝統文化 28.
- 田中宣一、三田村成孝、岩崎竹彦。(1986). ダムに沈む揖斐川水源の村：岐阜県揖斐郡徳山村。民俗学研究所紀要 10.
- 登録有形文化財（建造物）一覧。(2018). 月刊文化財 661.
- 藤橋村と二村合併に 県が最終方針固める。(1986年2月8日)。岐阜日日新聞。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1985). 美濃徳山村通信 創刊号～第12号：合本 1. 愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1986). 美濃徳山村通信 第13号～第24号：合本 2. 愛知県名古屋市：ブックショップ「マイタウン」。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1986-87). 美濃徳山村通信 第25号～第32号。岐阜県徳山村：徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会) 事務局。
- 徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。(1987). 美濃徳山村通信 第33号～第34号。岐阜県藤橋村：徳山村の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会) 事務局。
- 徳山村史編集委員会。(1973). 徳山村史。徳山村。
- 浜本篤史。(2001). 公共事業見直しと立ち退き移転者の精神的被害：岐阜県・徳山ダム計画の事例より。環境社会学研究 7.
- 片桐勝信。(1988). 徳山村戸入の民家、静岡県修善寺町で再建築。美濃揖斐谷通信 40.
- 母なる揖斐・長良・木曾：第2部・水利用 5。(1986年11月6日)。朝日新聞。
- 木村一夫。(1997). 多目的ダム開発と「揖斐谷」住民の変転(Ⅱ)。水資源・環境研究 10.
- 矢野敬一。(2010). 柳田国男と「山村調査」 民俗学確立期の研究体制とその運動論。静岡大学教育学部研究報告。人文・社会・自然科学篇 (61).
- 揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)。(1987-96). 美濃揖斐谷通信 第35号～第70号。岐阜県藤橋村：揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)。
- 落合知子。(2019). 普及版 野外博物館の研究。東京都：雄山閣。
- 脇田雅彦。(1992). 美濃・徳山村戸入：自然と人々。あしなか。
- 本稿ならびに『国登録有形文化財（建造物）旧宮川家住宅保存活用計画』執筆にあたり、旧宮川家住宅保存活用検討委員会（高橋宏之、溝口正人、佐滝剛弘、辻充孝、宮川澄雄、横田稔）のほか多くの方にご指導・ご協力賜りました。深謝いたします。なお、本文ならびに年表中は敬称略としました。

徳山村年表

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
紀元前2000	縄文時代中期より居住(石器・土器が出土)	
保元1 1156	上開田・六社神社創建	
延元3/建武5 1338	榎原・白山神社に新田義貞自害の伝説、「仁田四郎由定鳥山神社」碑に年紀	
興国1/暦応3 1340	塚白山神社神像墨書に南朝年号(興国)	
応永13 1406	上開田・六社神社鱧口銘	
文明4 1472	戸入石地藏銘	
文明8 1476	門入・八幡神社鱧口銘に「門丹生」	
天正1 1573	織田信長の朝倉攻めで朝倉方について坂内村広瀬から徳山村戸入に移住	
天正17 1589	本郷・山手・榎原・塚・門入の検知記録あり	
天正年間 1573-93	福井県鯖江・西福寺より柴田勝家に追われて門入に避難、十字名号(伝・誠照寺3世如覚筆)が伝世	
寛文2 1662	誠照寺15世秀誠が美濃廻りを始める(夏廻り)、オマワリの開始	
元禄1 1681	専念寺が越前温見から根尾に移転、秀誠が美濃廻りのために要請	
天保13 1842		白川村大牧・旧太田家
元治1~2 1864-65	天狗党の乱、水戸天狗党が蟻帽子峠越え	
慶応4/明治1 1868	旗本徳山氏知行地が尾張藩預け、のち笠松県に	
明治4 1872	第1次府県統合で岐阜県に	
明治6 1873	戸入に文柄舎(のち徳山小学校戸入分校、徳山中学校西谷分校)を設置	
明治12 1879		社寺什宝永世保存之議二付発議で社寺宝物以外に1000年以上前の建造物も保存対象に
明治15 1882		400年前の現存社寺建造物の調査を内務省社寺局通達
明治半ば~後半	旧宮川家:内部の造作と修理を実施、玄関部分の階段を付け替え	
明治17 1884		人類学研究会(のち日本人類学会)
明治22 1889	池田郡門入村・戸入村・大野郡塚村・榎原村・山手村が合併、池田郡徳山村に	『風俗画報』
明治23 1890	徳山村に郵便局開設、根尾局管轄	
明治24 1891	濃尾地震、根尾谷断層帯の活動による最大級の内陸地殻内地震(直下型地震)	
明治30 1897	揖斐郡を新設、揖斐郡徳山村となる	古社寺保存法
明治36 1903	門入から6戸21人が北海道虻田郡真狩村に入植	
明治39 1906		神奈川・三溪園
明治40 1907	藤橋村杉原より本郷に至る県道改修工事完了	
明治43 1910	鳴瀬橋を架設	柳田国男らが郷土会を設立
明治45 1912	この頃まで製紙が盛ん	
大正年間 1912-26	井戸掘り職人が来村、竪井戸を掘る	
大正1 1912	揖斐川電力(のちイビデン)設立 発電所建設開始、工事従事者の子どもが村内で初めて洋服通学	
大正3 1914	戸入・六社神社社殿を改築	
大正4 1915	徳山村に電灯がともる	
大正5 1916	門入に茅葺半二階が初めて建つ 揖斐川電力の西横山発電所完成、初の国産立軸水車を設置 この頃から段木の最盛期(～昭和6・1931)	
大正6 1917	荷車が藤橋経由で本郷に入るように 山手に分教場が開設、榎原の東谷分教場を廃止し塚分教場を開設	白茅会(佐藤功一、今和次郎、柳田国男ら)、民家の研究団体
大正7 1918	この頃、門入の民家にガラス窓が導入される	白茅会が郷土会と合同で神奈川県津久井郡内郷村に研究旅行
大正8 1919		市街地建築物法
大正10 1921	東横山発電所操業開始	
大正11 1922	久瀬村から藤橋村が分離	今和次郎『日本の民家』
大正12 1923	荷馬車が本郷に入るようになり、板板の出荷が盛んに	竹内芳太郎『飛騨白川村の民家』(『早稲田建築学報』2)
大正13 1924	橋浦泰隆『民俗探訪』美濃越え』	
大正14 1925	広瀬発電所運用開始	8月・石原憲治が白川村御母衣・遠山家を調査
大正15 1926		白川村平瀬に発電所ができる
昭和4 1929		『東大寺南大門修理報告書』初の修理報告書刊行
昭和6 1931	この頃、板板生産がピーク(～昭和19・1944)	
昭和7 1932	この頃から段木のクダナガシが発電所・ダム建設のため衰退	
昭和8 1933	根尾村へ抜ける馬坂トンネル開通 戸入大火、六社神社より東の26戸焼失 この年まで門入2戸が養蚕(夏秋2回)	江馬修が飛騨考古民俗学会を設立、『飛騨考古学会会報』(のち『ひだびと』)創刊 今和次郎らが民家研究会を発足 9/14:柳田国男の木曜会が始まる(1934:第1回開催)
昭和9 1934		川口孫次郎『飛騨の白川村』 全国山村生活調査(日本側隠岐村における郷党生活の資料蒐集調査)(1934・5～1937・4) 柳田国男『民間伝承論』 天理参考館に朝鮮半島の民家を移築 石原憲治『日本農民建築』全部16巻、刊行開始
昭和10 1935	川上発電所完成	民間伝承の会(のち日本民俗学会1949～) 柳田国男編『山村生活調査第1回報告書』 柳田国男『国史と民俗学』『郷土生活の研究法』 渋谷敬三らが日本民族学会(のち日本文化人類学会)を設立
昭和11 1936	山村生活調査の一環として桜田勝徳が徳山村調査(昭和14・1939再訪) 西平ダム着工	柳田国男編『山村生活調査第2回報告書』 民家研究会機関紙『民家』
昭和12 1937		柳田国男編『民間伝承の会』『山村生活の研究』 大阪・吉村家住宅、奈良・今西家書院が国宝指定(国宝保存法)
昭和13 1938		柳田国男編『海村生活調査報告書(第1回)』 渋谷敬三らが野外博物館計画(頓挫)の一環として武蔵野の民家・絵馬堂を移築
昭和14 1939	西平ダム竣工、これ以降、段木流しがなくなる 本郷・徳山郵便局に村初の電話開通	江馬三枝子『合掌造り民家と大家族制度』 ブルノ・タウト『日本美の再発見』

旧徳山村年表 旧徳山村民家(旧宮川家住宅主屋) 移築経緯に関連して

		徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
昭和15	1940	揖斐川支流坂内川に揖斐川電気(揖斐川電力を改称、現イビデン)が神岳ダムを建設、川上発電所の取水ダム 西平発電所の運用開始	
昭和17	1942	山手大火、33戸全焼	
昭和18	1943		江馬三枝子『白川村の大家族』
昭和19	1944	昭和東南海地震(東海地方は震度5)	京都・小川家住宅(二条陣屋)を国宝指定
昭和20	1945	三河地震(岐阜県は震度4) 本郷から門入への道路改修始まる(～昭和28・1953頃) <b>この頃から炭焼きが盛ん(～昭和30・1955)</b> この前後、養蚕が盛ん この頃から紙漉きが衰退 これ以降、カルサンからモンペへ移行	
昭和22	1947	7月:本郷大火、ベニヤ工場倉庫から出火、50戸全焼	
昭和24	1949	自家発電を申請 榎原分校舎を建設、集落独自で実施 この頃、門入の民家にトタン葺きが導入される	民間伝承の会を改称して、日本民俗学会 『海村生活の研究』 <b>1/26:法隆寺金堂焼失</b>
昭和25	1950	5月:本郷・開田が自家発電により点灯(徳山電力消費生活協同組合)	<b>日本民俗建築学会発足、『民俗建築』発刊</b> 建築基準法 <b>5月:文化財保護法</b>
昭和26	1951	榎田勝徳『美濃徳山村民族誌』、山村調査成果を刀江書院「全国民俗誌叢書」の一冊として刊行 岐阜方面への出稼ぎ者対象に旅館・徳山連絡所いずみ屋(岐阜市)開業	この年、白川村内に270棟の合掌造り
昭和26・27	1951・52	この頃までオマフリ様は徒歩で峠越え	
昭和28	1953	徳山村大火 久瀬ダム	重要文化財・吉村家住宅(大阪)民家建築として初の根本修理、報告書刊行
昭和29	1954	5/13:再び本郷大火、増徳寺から失火、118戸全焼	武蔵野郷土館(～1991・江戸東京たてもの園1993～) 白川村・鳩谷発電所
昭和29～48	1954-73	<b>高度経済成長</b>	
昭和30～40年代			<b>明治期洋風建築・民家の保存が急務に、文化庁・建築学会等が調査実施</b>
昭和30	1955	この頃から本郷～門入の道路改修により門入～坂内村のホハシ峠が廃道に この頃から大手木材会社(東谷:興国人絹・千頭木材・木原造林、西谷:王子製紙・木原造林)がパルプ材として原生林伐採(約10年で伐りつくす)	小倉強『東北の民家』、小倉強が「東北民家に関する一連の研究」で日本建築学会賞を受賞 この頃から民家調査が組織的に実施される
昭和31	1956	門入大火、25戸全焼	白川村大牧が鳩谷ダムで水没のため旧太田家を名古屋山動物園に移築 関西電力が豊中市に白川郷・旧大井家住宅を寄贈、日本民家集落博物館に移築 神奈川県で横浜国立大学による民家調査 この頃、大阪府で大阪市立大学が民家調査 <b>この頃から民家が系統的に文化財指定されるようになる</b>
昭和32	1957	<b>揖斐川上流域が電源開発調査区域に指定</b> 横山ダム着工 11月:村議会で徳山ダム建設反対を決議	白川村・御母衣ダム着工 白川村・御母衣第一発電所 <b>伊藤鄭爾・二川幸夫『日本の民家』1～10</b>
昭和33	1958	4/1:徳山中学校が徳山小学校より独立 岐阜乗合バス(根尾村樺見で乗り継ぎ、岐阜まで所要3時間)の定期運行開始、1日3回 徳山小中学校(中学校は併設校)から徳山中学校が独立、分校を廃止	大岡実他『神奈川県における近世民家の変遷』1
昭和34	1959	5月:徳山中学校清心寮を開設 9/26:伊勢湾台風による水害で孤立化、復旧工事による日雇い労働が導入される	白川村・御母衣ダム水没地から旧若山家住宅を高山市に移築、飛騨民俗館として開館(1998:飛騨民俗村へ再移築) 長野県で東京大学が民家調査 東京大学建築史研究室が秋田郷の民家調査 湖北地方民家調査
昭和30年代半ば			この頃白川村内に200棟の合掌造り
昭和30年代後半			白川村木谷で合掌造り民家7軒中6軒を非合掌造りに立て替え 集落解体が進む
昭和35	1960	県統計によれば、この頃、人口が最多(2294人)	三溪園に白川郷から矢野原家住宅を移築 伊藤鄭爾が「日本民家史の研究」で日本建築学会賞受賞 <b>大阪・日本民家集落博物館</b> 浅野清他『大阪府の民家』 城戸久らが三河地方民家調査 日本建築学会民家小委員会「民家調査基準」1 この頃農林業センサスから焼畑の項目がなくなる
昭和36	1961	農村電化促進法を適用、国・県・村・中部電力の資金で本格送電が決まる	白川村・御母衣ダム第二発電所 野村孝文『南西諸島の民家』
昭和37	1962	<b>下開田に村初の簡易水道が完成</b> 奥村三雄が戸入の孤立方言について学会報告 岐阜県教育委員会が揖斐川上流域総合学術調査 徳山小学校(本校)で完全給食 下開田(漆原)春日神社拝殿を改修して保育所を開設、4～11月の季節保育	辺地法 日本建築協会『ふるさとのすまい』
昭和38	1963	三八豪雪 3/30:戸入に簡易水道導入、11/10:山手、12/15:上開田 <b>5/27:徳山電気組合が自家発電を廃止、中部電力が完全送電</b> 7/24:本郷・上開田・下開田で徳山テレビ共同受信施設組合、10/27:テレビ受信開始 7/25:本郷・上開田・下開田で中電初点灯、8/14:戸入、15:門入 この頃まで製炭が続けられる	福井百年記念事業として岐阜県史編纂(～1973) 飛騨郷土館(のち下呂温泉合掌村) <b>白川村・萩町合掌造保存会</b> 大岡実他『神奈川県における近世民家の変遷』2 二川幸夫写真・伊藤ていじ解説『民家は生きてきた』
昭和39	1964	6月:横山ダム完成、藤橋村親・鬼姫生が水没、水没により西横山発電所が停止 3/15:塚に簡易水道	広域市町村圏振興整備措置

		徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
昭和40年代			集落再編成事業で行政による集落の消滅、自発的な無人化・離村が発生
昭和40～50年代			<b>民家の文化財指定が集中</b>
昭和40	1965	9/15:集中豪雨で徳山小学校本校舎が全壊、以降災害復旧工事が主産業に 榎原分校で給食開始 この頃、プロパンガスが普及、炭から転換(燃料革命) これ以降、村外産院などでの産出が増える	岐阜県教育委員会が民謡・民謡調査 山村振興法 愛知・博物館明治村 伊藤ていじ『日本の美術』21民家 文化財保護法制定(1950)以来、この年までに26件が文化財指定、これ以降民家の指定が増える(1966～80・269件) 岩手・旧菅野家住宅(享保5・1720築)を重要文化財に指定 この年までの重要文化財指定・民家は43棟
昭和41	1966		<b>文化庁補助事業・民家緊急調査(～1977)、民家の文化財指定が本格化</b> 『京都府の民家調査報告』1
昭和42	1967		天理参考館に白川村・合掌造り民家を移築(2000:白川村に返還) <b>神奈川・川崎市立日本民家園</b> 石川・江戸村(～1998、2010:移転して金沢湯涌江戸村) 太田博太郎他『民家のみかた調べ方』
昭和44	1969	岐阜大学教育学部郷土資料「揖斐郡徳山村方言」 村議会が県にダム建設早期決着を陳情、徳山ダム対策連絡協議会を結成 11月:村史編集発起人を開催、運営委員会・村史編集委員会(徳山小中学校教員からなる)発足	<b>民家緊急調査報告書を刊行、6件16棟が重要文化財指定</b> 白川村・野外博物館合掌造り民家園に9棟の合掌造りを移築(～1971)
昭和40年代半ば			この頃白川村内に140棟の合掌造り
1970年代			この頃から古民家の再生・移築が盛んに
昭和45	1970	この頃の人口は約1600人 この頃までに大手製紙企業がバルブ用材を首伐	飛騨民俗村に11棟の民家を移築(～1971) 川崎市立日本民家園への福島市・旧鈴木家住宅移築をきっかけに、福島市民家園が構想される 過疎法 この頃から文化財保護法による文化財民家の修理が増
昭和46	1971	<b>徳山ダム建設事業開始、ダム建設実施計画の調査立ち入り認め、全村90%余の調査完了</b> <b>岐阜県教育委員会が徳山村民俗資料緊急調査(～1972)、『岐阜県の民家 岐阜県民家緊急調査報告書』刊行</b> 宗教分布調査によると405戸のうち誠照寺派239戸、増徳寺74戸	飛騨民俗村 白川郷荻町集落の自然環境を守る会 吉田晴『日本の美術』60民家 朝日民家シンポジウム「日本の民家 その形成過程」 石川県立郷土資料館が白山麓民俗資料緊急調査を実施(～1972) 集落再編成事業(～1976)で119集落・922戸が移転、過疎地域の廃村が増加 この年度から「民家等買上げ」予算を国庫補助金に計上
昭和47	1972	昭和47年7月豪雨 <b>徳山ダム立ち入り調査、工事着工(1977完成予定)</b> 懸賞金付キツチノコ(ヨコヅチ)探しイベントを実施	白川郷合掌村(のち野外博物館合掌造り民家園) 宮城県総合博物館民家園 石原憲治『日本農民建築』1～9 復刻 文化財建造物保存技術協会設立
昭和48	1973	水資源開発促進法により徳山ダム建設を公示 3月:民俗資料緊急調査報告を刊行 5月:徳山村史刊行	岩手・北上市立博物館・みちのく民俗村 <b>川島省次『滅びゆく民家』1～3(～1976)</b>
昭和49	1974		全国文化財集落施設協議会 奈良県立民俗博物館
昭和50	1975		奈良国立文化財研究所(のち奈良文化財研究所)『高山一町並調査報告』 鈴木充『日本の美術』37民家 柳田国男生誕100年 <b>文化財保護法改正で建造物群保存地区に、集落町並みを指定する伝統的建造物群保存地区制度を新設</b>
昭和51	1976	徳山ダム事業認可、事業を建設省から水資源開発公団(のち水資源機構)に継承	香川・四国民家博物館(四国村)
昭和52	1977	谷汲の民家を大野町・陽勝寺に移築	<b>民家緊急調査報告書を刊行(2回目)、5件5棟が重要文化財指定</b> <b>文化庁・民家緊急調査が終了(1966～)、この年までに民家主屋285棟・付属屋合せて495棟を重要文化財指定</b> 国重要統的建造物群保存地区に6地区を選定 重要文化財・箱木家住宅(兵庫)ダム水没のため移築(～1979) 石川県立白山ろく民俗資料館(準備中)に尾田家・小倉家(国指定重要文化財)を移築復元
昭和53	1978	岐阜児童文学研究会・民謡研究のついで(中京女子大学)が民謡わらべ歌調査(～1983) <b>『岐阜県の民家 昭和52年度版民家緊急調査報告書』、戸入・榎場家、塚・森下家を所載</b> 9月:水資源開発公団から家屋移転の補償基準を提示(第一次損失補償基準)	石川県立白山ろく民俗資料館の尾田家「白峰の作り民家と生活用具」「白峰の作り生活の用具」を国重要有形民俗文化財に指定
昭和54	1979		石川県立白山ろく民俗資料館 この年までに民家主屋297棟・付属屋合せて530棟を重要文化財指定
昭和55	1980	桑田勲・岐阜女子大学が戸入民家調査 徳山連絡所いずみ屋(岐阜市)が廃業 4月:水資源開発公団が第二次損失補償基準を提示 この頃の人口は約1300人	<b>重要文化財指定の民家が300棟を超える(指定は一段落)</b>
昭和56	1981		学研『日本の民家』1～8 林野全孝が「論著『近畿の民家』など一連の民家研究」で日本建築学会賞受賞
昭和57	1982	藤橋村・杉原ダム建設による移転開始、東西杉原から古民家5棟を藤橋村歴史民俗資料館に移築 <b>増山たづ子『故郷:私の徳山村写真日記』、最初の写真集を出版</b> 1月:徳山村の歴史を語る会機関誌「ゆるえ」創刊	野外博物館合掌造り民家園に6棟を移築 福島市民家園
昭和58	1983	岐阜県教育委員会が民謡調査 桑田勲・岐阜女子大学が戸入民家調査 <b>1月:映画「ふるさと」(神山征二郎監督)</b> 8月:第1回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会) 10月:水資源開発公団が第三次損失補償基準を提示 <b>11月:ダム補償基準妥協協議し海拔400m等高線以下水没が確定、これ以降離村・移住へ</b>	北海道開拓の村 建築士学会発足、『建築史学』発刊 小寺武久『名宝日本の美術』25民家と町並

旧徳山村年表 旧徳山村民家(旧宮川家住宅主屋) 移築経緯に関連して

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
昭和59 1984	<p>徳山村民俗資料保存対策準備会、徳山村文化財保存対策協議会が発足</p> <p><b>徳山村文化財対策協議会が民具を収集開始</b></p> <p>「広報とく山」75号(8月)で民具収集を呼びかけ</p> <p>増山たづ子がエイボン功績賞を受賞</p> <p>徳山村の歴史を語る会「徳山村のあけぼのを求めて」岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告展</p> <p>3月:補償の個人契約開始、契約済み村民の離村が始まる</p> <p>7月:民話わらべ歌調査(第二次)</p> <p>7月:藤橋村歴史民俗資料館(移築民家)仮オープン</p> <p>8月:第2回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)</p> <p>8月:最後のオマワリ様</p> <p>8/23:門入で家屋の解体が始まる</p> <p>9/22:下開田で離村が始まる</p> <p>9月:県文化財保護センターが埋蔵文化財調査(～1985・3)</p> <p>10～11月:小川泰他が戸入民家調査</p> <p>11月:上開田・山崎家を解体、大野町・陽勝寺へ移築</p> <p><b>この年11月から、離村が本格化し、家屋の解体が進み、建物移築が増加</b></p> <p>この頃から村役場に民家移築の照会が入り、移築を斡旋</p>	<p>『山村海村民俗の研究』、『山村生活調査1回報告書』他の復刊</p>
昭和60 1985	<p>3月:岐阜県教育委員会『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区 埋蔵文化財分布調査報告書』</p> <p>7/6:増山たづ子が岐阜市に引っ越し、増山家は岐阜市に寄贈(のち岐阜ファミリーパークに移築)、7/13:増山家土蔵取り壊し、7/23頃:増山家解体</p> <p>7月末までに186戸取り壊し</p> <p>8/21までに約200戸を取り壊し、7割(470戸中約200戸)が離村</p> <p>8/24-25:第3回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)で博物館構想を発表</p> <p>8/25:第25回社会教育研究会全国集会・第17分科会「暮らしに生きる博物館」で徳山村博物館構想を発表</p> <p>8月初め:増山家を解体、8月中旬～9月上旬:岐阜ファミリーパークの基礎工事、9月中旬～:移築(12/20完成予定)</p> <p><b>9/30:徳山地区墓地移転合同報告発表</b></p> <p>10月:戸入・六社神社社殿を福井県朝日町・八幡神社へ移築</p> <p>10月:増山たづ子「ふるさとの転居通知」</p> <p>11/17:陽勝寺に上開田・山崎家(家道場)を移築</p> <p>12月:戸入・神足家を本巣に移築(建前)(～1986・3完成)</p> <p>12/16:揖斐郡町村会が広域合併が困難と結論、県主導で藤橋村合併へ</p> <p>12/24:岐阜ファミリーパークの増山家移築完了</p> <p>この年から冬季、戸入は無人に</p>	<p>福井市おきごえ民家園第1期工事、3棟を移築</p> <p>日本建築学会民家語彙集録部会『日本民家語彙集解』</p> <p>11月:久瀬村民俗資料館開館</p>
昭和61 1986	<p>1月:農村により本郷白山神社の元服式が中断</p> <p>2月:徳山村廃置分合問題が藤橋村との合併で決着</p> <p>2/2-28:美濃あけぼの会が大垣共立銀行長支店で岐阜市歴史博物館蔵の徳山村の木挽き道具を展示</p> <p><b>2/13:岐阜県教育委員会が徳山村文化遺産保存事業計画(4月～:埋文調査、民家(旧宮川家)移築、自然・生活環境調査、古文書収集・記録保存)を発表</b></p> <p>4月～:岐阜ファミリーパーク・増山家公開</p> <p><b>4/23-6/8:岐阜県博物館「徳山の四季とくらし」に18,978人が来場</b></p> <p>8月:文化財保存対策協議会を設置</p> <p>8月:第4回徳山の自然と歴史と文化を語る集い(徳山村ミニ学会)、徳山村での最後の開催</p> <p><b>10/10体育の日:徳山中学校運動場で徳山村解散式(お別れ運動会)</b></p> <p>10～11月:写真展「増山たづ子写真日記 ありがとう徳山村」を東京・名古屋・岐阜で開催</p> <p>11/23:本巣市歴史民俗資料館(旧神足家)開館</p>	<p>千葉県立房総のむら</p> <p>大河直躬『住まいの人類学 日本庶民住居再考』</p>
昭和62 1987	<p>収集民具1万点中千点が「徳山の山村生産用具」国重要有形民俗文化財指定、2/17:文化財審議会答申、3/3:官報告示</p> <p>3月:徳山村教育委員会「徳山の山村生産用具 概説・目録編』『同 実測図編』</p> <p>3/27:徳山中学校で閉村式</p> <p><b>3/31:徳山村農村、藤橋村に編入合併(約430人・旧徳山村人口は103人)</b></p> <p>3/31の閉村までに村仲介で民家32軒を村外へ移築</p> <p>6/14:愛知県西尾市で戸入より移築民家(無の里休養所)のふれあいの集い、6月中旬竣工、8月末完了見込み</p> <p>7月:増山たづ子「ありがとう徳山村」、岐阜県美術館で「ありがとう徳山村 増山たづ子写真展」</p> <p>7月:揖斐川町歴史民俗資料館に2棟移築予定</p> <p>8/29-30:第5回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)、藤橋村で開催</p> <p>秋:戸入の9棟、修善寺町へ移築完了</p> <p>10/7:旧宮川家の移築完了、公開開始</p> <p><b>10/25:8集落・8社を合祀して徳山神社を創建</b></p> <p>～10/28:名古屋市・西友高針店で「サヨナラ徳山村 フォト&amp;トーク」</p> <p>藤橋村歴史民俗資料館に杉原より5棟移築</p>	<p>四国民家博物館が「四国民家博物館における民俗文化財保存の業績」で日本建築学会賞受賞</p> <p>東京・府中市郷土の森博物館</p>
昭和63 1988	<p>戸入・若宮家を解体して関市・中池総合運動公園に移築</p> <p>門入八幡神社社殿を福井県鯖江市・松泉神社へ移築</p> <p>個人対公団ダム建設所との移転補償契約がほぼ完了</p> <p>～2/16:岐阜市・西濃信用金庫福光支店で「徳山の遊び展」</p> <p>8/27-28:第6回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p><b>10/13-11/27:京都府立山城郷土資料館「山村のくらし」で徳山村資料を展示</b></p>	<p>10/1-11/13:大阪市立博物館「山に生きた人びと その衣食住と生業」で飛騨地方の資料(飛騨民俗村収蔵品)を展示</p>
昭和63～平成1 1988-89		ふるさと創生事業
昭和64/平成1 1989	<p><b>3月:全戸の移転が完了</b></p> <p>8/26-27:第7回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p>10/14:藤橋村歴史民俗資料館・移築民家で県政夢おこしガヤガヤ会議</p>	<p>福井市おきごえ民家園、第2期工事で3棟を移築して開園</p> <p>宮城・国営みちのく社の湖畔公園(みちのく公園)</p> <p>宮澤智士『日本列島民家史』</p> <p>安藤邦廣『茅葺きの民俗学』</p>
平成2 1990	<p>1/7:1986以来中絶していた本郷白山神社の元服式、徳山神楽を岐阜市歴史博物館で再現</p> <p>1/15:本郷白山神社の元服式、徳山神楽を徳山神社で復活</p> <p>8/18-19:第8回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)</p> <p>横浜ダム再開発事業開始、ダム湖浚渫など、当初1982完成が1997に延期(のち2011に再延期)</p>	<p>『日本の美術:民家と町並』286東北・北海道、287関東・中部、288近畿、289中国・四国、290九州・沖縄</p> <p>降幡廣信が「民家再生の新しい方法論を確立するに至った多年の業績」で日本建築学会業績賞を受賞</p>

南本 有紀

	徳山村と周辺のできごと	文化財・民俗学・建築史・山村振興等のできごと
1990～2000年代		古民家再生ブーム
平成3 1991	8/17-18:第9回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)	『民俗建築』100号
平成4 1992	8/22-23:第10回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会) 12月:水資源開発公団徳山ダム建設所が旧徳山村民対象に「徳山だより」発行 旧住民対象に徳山ダム工事見学会、以後、毎年実施 開村5年、遡年居住者はおらず、旧徳山村に住民票があるのは32人	草野和夫が『著書「東北民家史研究」に集大成された一連の民家史研究』で日本建築学会賞を受賞
平成5 1993	8/21-22:第11回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会) 11月:揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)が揖斐郡B大賞受賞、 揖斐地域の活性化に寄与	江戸東京たてもの園(前身は武蔵野郷土館) 建築修復学会
平成6 1994	8/20-21:第12回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会) 3月:最後まで残っていた本郷・共有林の買収交渉が概ね合意、これによりダム完成は 2002見込み	富山博『日本民家調査研究文献総覧』 川崎市立日本民家園が「日本民家園における近世民家の体系的収集保存、公開と環境 整備」で日本建築学会賞を受賞
平成7 1995	建設省(のち国土交通省)がダム等事業審議委員会を設置、中部圏では徳山ダム・矢作 川河口堰が見直し対象事業に 8/19-20:第13回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)	民家語彙集録グループ代表草野和夫が「民家語彙の集録とその解説に関する一連の 業績」で日本建築学会賞を受賞
平成8 1996	6月:岐阜県博物館で「徳山のくらし体験 地獄うどんを食べよう」を初開催 8/24-25:第14回揖斐谷の自然と歴史と文化を語る集い(揖斐谷ミニ学会)	文化財保護法改正で文化財登録制度を新設、対象は建造物
平成9 1997		日本民家再生リサイクル協会(のち日本民家再生協会) 日本民家集落博物館で山村サミット、白川村が参加
平成10 1998		旧八百津発電所施設を重要文化財に指定 第1回民家フォーラム(日本民家再生リサイクル協会)
平成11 1999		福島・いわき市暮らしの伝承館 岡山・古民家再生工房が「古民家再生工房」の継続的な活動」で日本建築学会業績賞を受賞 平成の大合併(～2010)
平成12 2000	<b>徳山ダム本体工事</b>	『日本の美術』406離島の建築
平成13 2001	岐阜県博物館「わたしの徳山 増山たづ子故郷の記録」(～2002)	全国茅葺き民家調査(農水省)、調査対象120市町村(～2003・3)
平成14 2002	徳山ダム共用予定(1994当初)	兵庫県でヘリテージマネージャー(兵庫県歴史文化遺産活用推進員)制度発足
平成15 2003	<b>徳山民俗資料収蔵庫が開館</b>	旧江戸村から金沢湯涌江戸村に移築(～2010:開村)
平成16 2004		文化財保護法改正により文化財登録制度に建造物以外の有形文化財を追加
平成17 2005	1/31:揖斐郡谷汲村・久瀬村・春日村・坂内村・藤橋村を揖斐川町に編入合併 旧八百津発電所施設を文化庁・近代化遺産に追加認定	大阪府登録文化財所有者の会発足、以後、京都・愛知・和歌山・秋田・東京で所有者の会 が設立される
平成18 2006	徳山ダム本体盛り立て完了 3/7:増山たづ子没 9/22:国道417号付替工事、徳山バイパス開通 9/25:徳山ダム試験放水 7/15-9/3:岐阜県博物館で水資源機構徳山ダム建設所・岐阜県文化財保護センターが 「織文人ってなかなかすごい!! わくわく徳山縄文ワールド」	
平成19 2007	岐阜県博物館「心の宝、ふるさと徳山 増山たづ子写真展」 経済産業省・近代化産業遺産群33に揖斐川の水力発電関連遺産(東横山発電所・広瀬 発電所・川上発電所)を認定	
平成20 2008	10/13:徳山ダム完成	蒲島郁夫熊本県知事が「ダムに頼らない治水」表明、川辺川ダム建設を白紙撤回
平成21 2009		「コンクリートから人へ」を標榜した民主党政権が川辺川ダム建設事業を休止
平成23 2011	横山ダム再開発事業完了	
平成24 2012	本巣市で自家消費用に栽培されていた徳山唐辛子を発見、特産化に取り組む(2018 ～:JA直売所で販売) 広瀬発電所改修工事竣工	
平成25 2013	脇田雅彦没 静岡県・IZU PHOTO MUSEUM「増山たづ子 すべて写真になる日まで」	大阪府でヘリテージマネージャー育成講座開始
平成26 2014	10/19:徳山村移転30年ふれあいまつり(本巣市役所)	岐阜県が県単小水力発電施設整備事業を開始
平成27 2015	8/26-9/27:photographers' gallery/増山たづ子 ミナシマイのあとに」	11月:登録有形文化財の総数が1万件を超える
平成28 2016	5/24-2016/6/19:仙台アーティストランプレイス「増山たづ子と東北の記録者たち」	
平成29 2017	徳山村開村30周年 岐阜県博物館移動展「見つめる目 写真家の見た飛騨美濃～細江光洋の飛騨・増山たづ 子の徳山・後藤英夫の円空～(高山市・飛騨高山まちの博物館) 揖斐川町小津・下辻南清流発電所、坂内・諸家清流発電所が操業開始	
平成30 2018	徳山ダム10周年 11/2:旧宮川家住宅主屋が国登録有形文化財(建造物)に登録	
平成31/令和1 2019	本巣市・JAぎふが徳山とうがらし連絡協議会を結成	
令和2 2020	岐阜県博物館「国登録有形文化財(建造物)旧宮川家住宅主屋保存活用計画」	令和2年7月豪雨で熊本県球磨川水系・川辺川で洪水発生、11月に流水型ダム建設を国 に要望、多目的ダムから流域治水に方針変更
令和3 2021	1/15:大牧富士夫没	

- ※ 文末の文献リストを元に作成
- ※ 表中は敬称略
- ※ 徳山村と周辺は、編入合併される藤橋村・揖斐川町を指す
- ※ 現在名称を略した組織・機関がある